

今、佐伯の古代が見えてきた

さとうたくみ



先日、堅田汐月の上ノ台を訪れた。ここは古代佐伯院があったと推定される候補地の一つで、近くには長良貝塚がある。中世佐伯氏の時代には、幾多の争乱に巻き込まれた古戦場でもあるが、近世以降は静かな農村のたたずまいを伝えて今日に至っている。

このような貴重な歴史を包含した地形であり、集落の形成と発展過程を学習するには最適な環境である。しかしここは総合運動公園の建設予定地となり、開発に迫られるように事前の発掘調査が行われている。

発掘現場では石器や土器など、縄文時代から中世に至る出土品や住居跡を見ることができた。漁網に使った土錘など海部の生活を匂せるものや、矢尻に使う黒曜石、古墳時代の須恵器や中世の青磁など、海部の交易の広さを物語る遺物が多い。

現段階は部分的な試掘調査に過ぎないが、有史以来連続と続いた集落の全体像が浮き彫りにされるのは、今後の本調査にかかっている。徹底した説明を望みたい。

今や空前の古代史ブームも、海部の佐伯までは及んで来ないのか、地元民の関心の薄さが気にかかる。

古代への旅立ち

以前、御手洗一而氏の「独立国佐伯」に触発されて、古代の謎解きに足を踏み入れたが、いまだに「〇〇王国佐伯」の幻影に悩まされている。ここでは定説にとらわれない自由な発想のまに、〇〇王国を探す旅に出かけることにする。

今のところ佐伯の地名の由来は、佐伯連男や佐伯宿禰久良麻呂などの人名説と、佐伯部の移住による部民説に支配されている。したがって、その時期は「豊後風土記」編纂以降の八世紀後半というわけである。

(佐伯市史・独立国佐伯・佐伯氏一族の興亡 参照)

では、それ以前の佐伯は果たして名もない未開の土地だったのだろうか、決してそうは思わない。この地方に古代人の形跡がまったく無いのならともかく、番匠川上流の本匠村には旧石器時代の洞窟遺跡が数カ所あり、それに続く縄文・弥生時代の遺跡も番匠川流域に広く分布している。特に佐伯市内で発見された遺跡について「日本地名大辞典」には次のように説明している。

番匠川下流域の台地上に下城遺跡・長良遺跡・白瀉遺跡などの弥生遺跡がある。前二遺跡は下層部に縄文

早・前期の遺物を包含した縄文遺跡でもある。とくに下城遺跡は戦後間もない昭和二十三年に発掘調査された。この時出土した土器に「下城式」という呼称が与えられた。この土器は東九州一帯に広範囲に分布する土器形式である。

三遺跡からは鉄滓も出土し、加えて下城・白瀉の両遺跡には竪穴式住居址が貝塚を相伴して発見されており、弥生中期にはすでにかなりの程度の集落が営まれていたようすが確認できる。

ここでは、「縄文遺物を包含した弥生遺跡」と事もなげに述べられているが、狩猟採集の民が稲作や鉄器などの大陸文化を受容する大きな変革の時期であったことを忘れてはならない。



「佐伯市史」には更に詳しい記事が掲載されているが、この地の鉄製品の生産について次のように論じている。

下城、長良貝塚から二つの工房を想定すると、その生産量は相当なものになる。また当時の状況からして生産量はこの地域内の需要を満たして余りあるとみられ、余剰になった製品は当然交易の材料として他の集団におくられたことであろうから、この地の製鉄の工房は非常に問題である。

この工房址については疑問視される向きもあるが、その可能性もまったく失せたわけではない。いずれにしても古代の佐伯が未開の地ではなく、農耕と製鉄技術を持った集落として形成されつつあったことを理解しておきたい。

記紀の中の佐伯

そこで、もう一度「佐伯」の語源を探ってみよう。「常陸国風土記」の中

に地名次城の由来を二説記した項があり、その中に佐伯の名が出ています。

○古老いへらく曰へらく、昔国くず巢、山の佐伯さへき、野の佐伯さへきありき、
普あまねく土窟つちくわを掘り置きて、常に穴に住すみ；（中略）

○或るもの曰へらく、山の佐伯、野の佐伯、自ら賊の長とよと為り、徒衆とらを引率ひきいて、國中くぬちを横しまに行き、大く却め殺しき、時に黒坂命くろさかのみこと、此の賊あを規はかり滅ほろさむとて、茨うばらを以ちて城きを造りき、所以このゆえに、地の名すなわを便ちち
茨城うばらきと謂いふといひき。（後略）

一説では佐伯の野蠻で狂暴な性格を、二説では秩序を乱す賊首として描かれ、いずれも朝廷側によって鎮圧された説話になっている。

その後の佐伯部について、「平凡社大百科事典」を引けば次のように解説している。

《日本書記》の景行天皇四十年、五十二年条、《新撰姓氏録》などによると佐伯部はヤマトタケルノミコトの東征の時に捕えられた蝦夷（えみし）であるとし、播磨・安芸・讃岐・阿波・伊予の五国に配置されたという。これは伝説であるが、佐伯部が蝦夷であり、西国諸国に配置され、なんらかの軍事的役

割を果たしていたことは事実であろう。

以上は両者とも、大和政権が逆賊である佐伯を退治し、あるいは服従させたことを述べている。いわば大和朝廷に逆らっていたサエギが、後に服属して朝廷を護衛するサエギの任についた。というゴロ合わせの説を生じる結果となっている。しかも景行天皇の時代といえは三世紀、弥生時代の後期にあたる。



第三の地名説

われわれはこの「佐伯」の文字と「サエギ」の意味にいささか翻弄され過ぎたのではあるまいか。以前わが佐伯の駅名が「サエキ」から昔の「サイキ」の読みで改称された経緯があるが、サエキ・サヘキ・サヒキ・サイキと読んでも、微妙な発音の差でしかない。また漢字は当字なので必ずしも「サイキ」ではなく、「サイ・キ」と解釈してもよいわけである。以上のことを念頭に再び「姓氏辞典」をめぐってみよう。

○ 鉏蝦夷 サヘギノエゾ・サヘノエゾ

齋明記四年条に「胆振鉏蝦夷廿人」と見え、伊浮梨婆陞（イフ）と注す。佐伯と云ふと関係あるか。

○ 佐比部 サヒベ 職業部の一にして鉏（スキ）を作る品部なれば、鍛冶部の一種と考えられる。常陸風土記に「鍛冶佐備（サヒ）大麻呂」慶雲元年頃見えたり。

サヒ・サイはもともと鉄のことで、サヒベが鍛冶屋であるなら、サイキとは鉄の生産地を指す言葉ではあるまいか。特に農耕用のスキを作ったという点では、わが佐

伯の工房遺跡により近くなった感じがする。

佐伯は産鉄族

『常陸国風土記』にいう山の佐伯、野の佐伯は決して未開の部族ではなかった。

大和政権に逆らえるだけの文化を有しており、特に製鉄技術を持った先住の渡来民か、彼等に感化された土着の産鉄集団であった。

その佐伯を茂城を築いて滅ぼしたのが黒坂命で、その名前から朝廷側の鍛冶師と思われ、鉄をめぐる争いであったことを暗示している。当時の鉄のもつ意義を考えれば、「鉄を制する者、天下を制す」ほどの影響力があり朝廷としてはこれらの職人集団を政権下に統括する必要があったのである。

しかし、佐伯には常に蝦夷という影がつきまとい、て気にかかるが、産鉄国佐伯の意味からすると、なにも蝦夷地に限らない地名である。朝廷が佐伯部を配したとする五国は、いずれも瀬戸内文化圏に属することから、私地名先行説をとって、蝦夷佐伯部説は統治者側の作為と考えたい。

海部郡は鍛冶王国

ち返ろう。

ここで天平五年（七三三）に完成した『豊後国風土記』の海部郡に立

あまへのこほりさとよところ　うまやひところとよひふたところ
海部郡 郷は四所^{平は} 一 駅は一所、烽は二所なり。
こほりおほみだから　みなうたべあ
此の郡の百姓は、竝、海辺の白水郎なり。因りて
あまへのこほりい
海部郡と曰ふ。

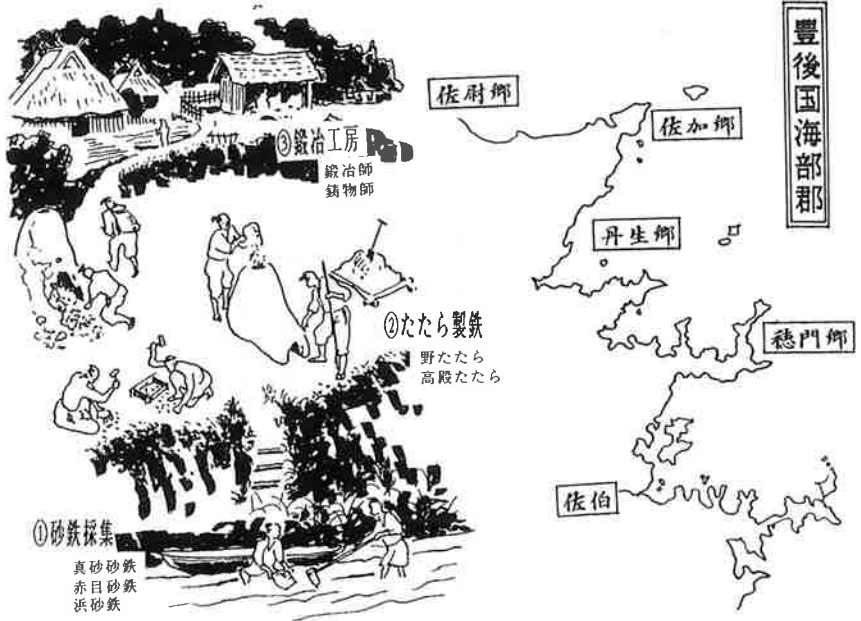
佐藤四信氏の解説によると、郷四所の所在地は次のとおりである。

- 一、佐尉郷 さいのさと 旧大在村、小佐尉村、坂ノ市町細方面
- 一、佐加郷 さかのさと 佐賀関方面
- 一、丹生郷 にみのさと 旧丹生村、川添村、臼杵市方面
- 一、穂門郷 ほとのさと 津久見市、上浦町、大入島方面

風土記の編纂にあたっては、「郡郷の名には好き字を著けよ。」と命じているが、新たに地名をつけたという意味ではない。

そこで「もとの名は酒井、いま佐尉郷というは訛れるなり。」あるいは「最勝海藻の門^{はつめ}という。いま穂門^{ほと}とい

豊後国海部郡



うは訛れるなり。」としているが、サカイノサイ、ホツ
 ノトノホトとは訛り難い。おそらく風土記の編者が、
 古伝説と地名とを強引に結び付けようとした結果で、こ
 の時すでに地名は本来の意味を失い、人々に忘れ去られ
 ていたかも知れない。

これらの郷名を、私は次のように解釈したい。

一、佐尉郷 サイは佐伯のサイと同様に砂鉄の産地で、
 大サイ、小サイ、細(サイ)などの地名を

今に残している。

一、佐加郷 《続日本紀》によると朝鮮から移住してき
からかみち
 た韓鉄師(鍛冶集団)は坂本臣の姓を賜わ
 っている。サカは鍛冶に関わるものと思う。

佐賀県佐賀市に佐嘉神社あり。

一、丹生郷 《豊後国風土記》に解説のごとく朱沙(水
 銀)の産地。ニウは水銀のこと。

一、穂門郷 《古事記》にホトタタライススキヒメノミ
 コトあり。次田真幸は「ホトは女陰である

が、鍛冶の炉の中心の【火窪ほど】が連想され
 ている。タタラは踏鞴たたらの意」としている。

以上の地名から、海部郡は産鉄地であり鍛冶集団によ

って開発が進んだと考えられる。そのホト郷の南に【古代産鉄王国サイキ】は存在したのである。

王国への鍵

もちろん、風土記にあるように海部郡は白水郎あきの住む村々であったが、いつの時代か鉄を求めて南下してきた集団があったと解すべきであろう。海部のリアス式海岸は船による往来が自由であり海の浸食によって岩層があらわになっている。鉱脈を探り浜砂鉄を採集するには比較的容易な場所だったといえる。

それではいよいよ【産鉄王国佐伯】の鉄を求めて推理を進めよう。その手がかりは、やはり地名に頼るしかない。今となつては意味不明の地名も多いが、学者諸氏によって種々な解説が試みられている。特に最近では朝鮮語による解明が効果をあげており、私には富来隆先生に示唆されたことが幸いであった。

ここでは種々な文献を乱読した結果、私なりの偏見も加えて謎解きの鍵としている。今回はそれらしき地名を抽出することとどめて、次回からは現地を踏査しながらの報告にしたい。

黒Ⅱ鉄をクロガネという（黒沢、黒岩、黒土、黒島）
赤Ⅱ銅をアカガネという（赤木、赤水、赤石、下赤）
サイⅡサヒⅡサビⅡ砂鉄（西野、細田、西河内）
アラⅡ砂鉄（荒瀬、荒内、荒網代）

ニウⅡ丹生Ⅱ水銀朱（大入島、米水津、入津湾、丹賀）
カリⅡ朝鮮語の銅（狩生、狩床）

ナガラⅡウル語の銅工Ⅱ鍛冶（長良）

フクⅡタタラを吹くタタラ師（福泊、小福良、市福所、

福網代、吹浦、吹原）

カマⅡホトⅡ溶鉱炉（保戸島、蒲戸、釜ノ浦、蒲江）

カジⅡ鍛冶（鍛冶屋、鍛冶屋敷、梶寄）

ハタⅡ新羅系渡来人秦氏（畑木、畑野浦）

シラギⅡ新羅（白木、須留木、白木ケ迫）

コウクリⅡ高句麗（加久良、神楽山、小浦、木浦）

クダラⅡ百齊（久多良木）

※参考文献「日本の中の朝鮮文化」金達寿「鍛冶屋の母」
谷川健一「豊後を彩る英雄たち」富来隆「風土記」秋本
吉徳「古事記」次田貞幸「常総の歴史」「豊日史学」

